

# 自らの判断、責任で行動する 思考型、探究型の学生を育成

学習院大学学長 福井憲彦氏

## 六〇年前に官立から完全民営化した日本唯一の大学

本誌 学習院は皇族が通う大学として知られています。

福井 本学は一八四七年に京都御所脇に設けられた学習所を淵源に一六〇年以上の歴史を持っており、戦後、私立大学として再発足してからも六〇年になります。戦前は宮内省が所管する官立学校として主に華族の子弟を日本のリーダーとして育成するという使命を持っていましたが、戦後になって完全に民営化され、宮内省（宮内庁）とは制度上まったく関係がなくなっています。現在、国立大学も国立大学法人になりましたが、財政の基本は国によって税金から賄われていますので、国立であることに変わりはありません。しかし、本学は六〇年前に民営化されており、国立が完全民営化した学校と違うのは日本の歴史において学習院だけです。また、官立学校の当時でも学生は全員が華族の子弟だった訳ではなく、ほぼ三分の一は一般市民の家庭の子弟が入学していました。

本誌 学習院では幼稚園から一貫して少人数教育を行っていますね。

福井 二〇〇九年度の本学入学者

は法学部、経済学部、文学部、理学部の四学部合わせて一九五二名、大学院は全研究科合わせて博士前期課程一四一名、後期課程二八名の合計一七〇名、法科大学院は四九名です。この数字が示すように、本学はいわゆるマンモス校とは違います。一部に大教室の授業もありますが、四人以下の授業が全授業の七割を占めており、フェイス・トゥ・フェイスに近い教育を行っています。また、本学では教員一人に対して一部屋の個人研究室があり、学生への個別指導を授業時間外でも随時行うことができます。このほか、キャンパスが東京・目白の一つだけですので、文系と理系など全学生が同一キャンパス内で学生生活を送ることができ、異なったジャンルの学生などと接しあえることもメリットだと思います。なお、学習院が目白に移転してきたのは一世紀ほど前の一九〇八年ですが、東京空襲など戦災を乗り越えて維持されてきた七つの建造物が今年三月に国の有形文化財として認定登

録されました。

「広い視野、たくましい創造力、豊かな感受性」を実現

本誌 一九七三年に教育目標の再確認を行っています。

福井 学習院には幼稚園から大学院までありますので、共通の目標として「広い視野、たくましい創造力、豊かな感受性」という標語をその時に掲げました。この標語の内実を各段階の教育を通じて実現しなければならぬと考えており、大学では次の四点を基本理念として教育に当たっています。第一は新たなことにチャレンジして良いものは進んで取り入れる進取の精神です。現在の学生はネット社会で育っていますので、情報などは簡単に入手できると思っていますが、受け身でなく自分から進んで取りに行くことが必要です。第二は品性の陶冶です。これは身分や家柄だけに依拠するのではなく、また単純に地位や資格、能力だけではなく、人から品格を認められるような存在になれるということになる。



しょうか。そして、第二は正確な判断力を磨くことで、第四が規律と自主性という一見すると互いにつかり合いそうな両面を備えることです。さらに、これからは二重の意味での「じりつ」が求められています。一つは自らの足で立つという意味の自立で、もう一つは自らの行動を律するという意味の自律です。与えられた枠組みを自明のものとして受け入れてしまうのではなく、自らの判断責任で行動、解決策を考えていく思考型、探究型の学生を育てていき

たいと思っています。  
**本誌** 現在の学生は視野が狭くなっているようですが。  
**福井** 友達関係など身の回りの狭い世界に目を奪われがちな若者が多くなっているように思います。しかし、世界に目を向ければ学校に行きたくても行けない子供たちがアジアやアフリカなどに数多くいます。ユネスコが現在もEFA（すべての人に教育を）という目標を掲げざるを得ない現実が世界には依然としてあるのです。現在の日本はモノや情報

が豊富にあり、逆に学生の視野が狭くなっている気がします。学問の世界も知の世界も、これからは地球のスケールで生きなければいけない時代です。それが日本の足元を見つめることにも繋がるとい時代が始まっています。本学ではこういう時代の現実を見据えた勉学を重視しています。また、今の学生はコミュニケーション力が弱くなっていると思います。特定の人とはコミュニケーションできるのですが、興味、関心が違う人だと上手くできない人が多い。本学は前述のように全学生が同一キャンパスで過ごしますので、さまざまな学生や教職員などと接することによりコミュニケーション力を高めるとともに、物事に真正面から向き合い、視野を広げて世界を見て欲しいと思います。  
**本誌** 学長の専門はフランスを中心とした西洋近代史ですね。  
**福井** 現在の生活の中で水は水道の蛇口から出るのが当たり前で、電気や電話なども普通のことですが、いずれもほんの少し前までは当たり前ではありませんでした。それではどのような歴史的背景から水道が普及したのか。単なる便利さの追求な

のか、それとも衛生観念や社会秩序の考え方までかわっていたのだろうか。また、電話の普及は人々の社会関係のあり方や行動形態をどのように変えたのだろうか。こうした多様な問いは歴史的な過去を知るうえで重要なだけでなく、現在の歴史的な位置を理解するにも大切なことで、今後このように歴史的にモノをみる人が増えることを期待しています。

**福井憲彦**（ふくい・のりひこ）氏  
 1946年、東京都生まれ。1970年、東京大学文学部西洋史学科卒業。1973年、東京大学大学院人文科学研究科（西洋史学）修士課程終了。1974～1976年、フランス政府給費留学生としてパリ第一大学に留学。東京大学文学部助手などを経て、1988年、学習院大学文学部史学科助教授。1991年、同教授。2004年、同文学部長。2007年、学習院大学学長に就任。日本ユネスコ国内委員会委員など歴任。著書に「時間と習俗の社会史」「歴史学入門」「近代ヨーロッパの覇権」など。